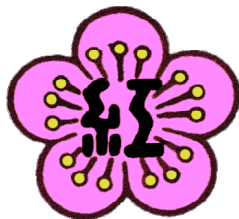


創立明治7年
開校147周年

令和3年度 紅梅小だより

赤塚っ子学びのエリア



紅梅

6月号

令和3年5月31日
板橋区立紅梅小学校
校長 小宮孝之

〇たくましい子

〇よく考える子

〇思いやりのある子

「子供の貧困」が動かした社会の功罪を考える

校長 小宮 孝之

生まれ育った環境によって成長に必要な生活環境を保証されず、栄養のある食事ができなかつたり、教育の機会が与えられなかつたりする子供たちがいます。日本全国に約140万人、30人学級で考えると約4人いる、ということになります。「子供の貧困」とも言われます。

そうした子供たちを社会でサポートしていこうとする取り組みが「子供の居場所」です。中でも食事を安価で提供してくれる「子供食堂」という支援が広がっています。子供食堂は子供たちに食事を提供するだけでなく、帰りが遅い親御さんが一緒に食事をすることもできます。板橋区にも安価で食事を提供してくれるお店がいくつもあります。近くは高島平、徳丸、成増などにも見かけます。人が集まる場所ができたことで、地域の皆さんの新しいコミュニケーションの場としても機能し始めています。



そもそも子供食堂は、大田区の八百屋さんが始めた事業で、ごはんを十分に食べることができない子供たちに食事を提供するというものでした。すると、この活動を知った豊島区の子供支援団体が自らの活動に取り入れ、瞬く間に全国に広がっていきました。手作りで温かい食事が格安で食べられる、アットホームな雰囲気です。誰かと食事ができる、子供同士、親同士のコミュニケーションが取れる、あつという間にそういう場所になっていったのです。

奈良市のとんかつ店「まるかつ食堂」は2018年5月、お腹が空いてもお金がない子に無料で食べられる無料食堂を始めました。店長の金子友則さんは、「世の中お互い様ですので、お代は出せなくてもいいですし、忘れてもらってもいいです」と言いました。今の時代は、「純粋に世の中の役に立ちたい」という思いが分かると、それを支持するニュースがSNSを通じて一気に広がります。「素敵すぎて泣けてくる」「今涙を流しながらリツイートした」「遠くて食べに行けないけど、胸いっぱいになりま

した」などと多くの評判を呼び、3年間で800人以上の人がこの食堂を利用してきました。

しかし、今年の4月頃から急に利用者に変化が出てきたと言います。元気でお金もある印象の人を中心に「厚切り弁当8個」「ミックス弁当10個」というような注文をしてくるのが増えたというのです。中には「高速乗ってわざわざ来たんだから早くして！」と店員に迫る利用者もいて驚かされたとか。「最初はコロナ禍で困っている人が増えたのかと思っていましたが、さすがにちょっと異常だと思うようになった」と店長の金子さんは話します。どこかで「無料でお弁当を食べられる」といった誤った情報が独り歩きしてしまい、本来の目的とは異なる状況が生まれてしまっているのでしょうか？家庭によって事情は異なるため、金子さんは見た目で判断せず、できるだけこの取り組みを続けたい意向を示しています。



ですが、この調子でしたら継続は難しいと思われます。善意でやっていることを利用し、店自体が続けられなくなってしまえば、本当に支援を必要としている人たちは余計苦しくなるでしょう。誰でも無料で食べさせてくれる店がある、という間違った情報が広まってしまったら、止めることは難しい。利用される方に悪気はないと思うので、SNSなどで皆様の力を借りながら、正しい情報発信をして誤解を解いていくしかない。

感染症やそれに伴う様々な規制で、多くの人が困窮している現代、私たち大人は子供たちにどのような姿を見せていくべきでしょうか。そして、一億総タブレット時代、子供たちがすぐにアクセスできる様々なSNSはどのようなものであるべきでしょうか。そんなことを考えさせられました。